

各関係機関の長 殿

鹿児島県病虫害防除所長

令和8年度病虫害発生予察情報について

このことについて、発生予報第5号（8月）を発表したので送付します。

鹿児島県病虫害防除所

〒899-3401
南さつま市金峰町大野 2200
TEL:099-245-1081（代表）
099-245-1157（直通）
FAX:099-245-1149



テレホンサービス：099-296-6431
（7～9月）

ホームページアドレス：<https://www.pref.kagoshima.jp/ag13/kiad/boujoshou/index.html>

メールアドレス：nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp

農薬の安全使用に努めましょう

農薬安全使用五つの柱

- | | |
|--------------|---|
| 1. 使用する人の安全 | 使用者自身の健康管理、安全使用 |
| 2. 作物に対する安全 | 適期、適正防除で薬害防止 |
| 3. 農産物に対する安全 | 消費者へ安全な農産物を供給
（農薬安全使用基準の遵守） |
| 4. 環境に対する安全 | 周辺環境への影響防止
（周辺住民等への危被害防止）
（河川、湖沼、海等への汚染防止）
（養蚕、養蜂等への危被害防止） |
| 5. 保管管理の安全 | 保管管理の徹底で事故防止 |

農薬ラベルを確認しましょう

農薬の飛散（ドリフト）にも注意しましょう

令和8年度 病虫害発生予報 第5号

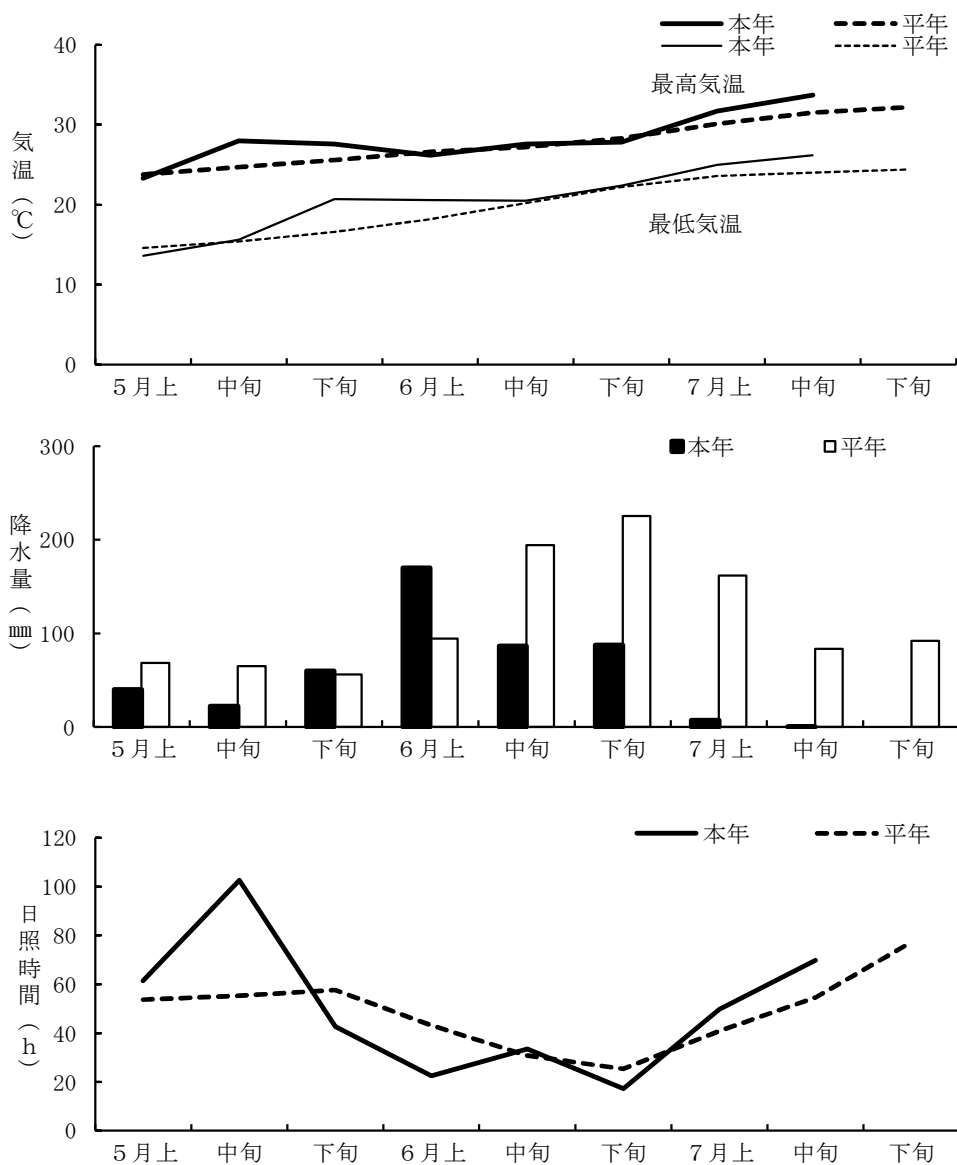
令和8年7月30日
鹿児島県病虫害防除所

【気象概況】

I. 向こう1か月の予報（7月25日～8月24日） 令和8年7月23日 鹿児島地方気象台発表

要素	地域	確率（％）			概要
		低い(少ない)	平 年 並	高い(多い)	
気 温	九 州 南 部	1 0	2 0	7 0	九州南部、奄美地方ともに気温は高い。九州南部、奄美地方ともに降水量はほぼ平年並み。九州南部の日照時間は平年並みか多い、奄美地方は、ほぼ平年並みの見込み。
	奄 美 地 方	1 0	4 0	5 0	
降 水 量	九 州 南 部	4 0	3 0	3 0	
	奄 美 地 方	4 0	3 0	3 0	
日照時間	九 州 南 部	2 0	4 0	4 0	
	奄 美 地 方	3 0	3 0	4 0	

II. 5～7月の気象情報（鹿児島地方気象台 観測点：加世田）



【 病 害 虫 発 生 予 報 の 概 要 】

作 物		病 害 虫 名	発 生 量	
			現 況	予 報
普通作物	普通期水稻	葉いもち	やや少	やや少
		穂いもち	—	やや少
		紋枯病	並	やや多
		トビイロウンカ	並	並
		コブノメイガ	多	多
	サツマイモ	ナカジロシタバ	並	並
		ヒルガオハモグリガ	多	多
	サトウキビ	バッタ類（熊毛地域）	並	並
		〃（奄美地域）	多	多
野菜	イチゴ（苗床：子苗）	うどんこ病	並	並
		炭疽病	やや少	やや少
		ハダニ類	並	並
	サトイモ	疫病	並	並
		ハスモンヨトウ	やや多	やや多
花き	キク（施設）	ハダニ類（県本土：施設）	少	少
		アザミウマ類（県本土：施設）	やや少	やや少
果樹	カンキツ	かいよう病（果実）（県本土・熊毛地域）	並	並
		〃（奄美地域）	やや多	やや多
		黒点病（県本土・熊毛地域）	並	並
		〃（奄美地域）	並	並
		ミカンハダニ（県本土・熊毛地域）	やや多	やや多
		〃（奄美地域）	やや少	やや少
		ゴマダラカミキリムシ（県本土・熊毛地域）	並	並
		〃（奄美地域）	並	並
茶樹	チャ	炭疽病	やや多	やや多
		新梢枯死症（輪斑病菌による）	少	少
		網もち病	やや少	やや少
		チャノコカクモンハマキ	並	並
		チャハマキ	並	並
		チャノホソガ	多	多
		チャノミドリヒメヨコバイ	やや多	やや多
		チャノキイロアザミウマ	少	少
		カンザワハダニ	多	多

【 病 害 虫 発 生 予 報 】

I. 普通作物

1. 普通期水稻

(1) いもち病

ア 予報内容

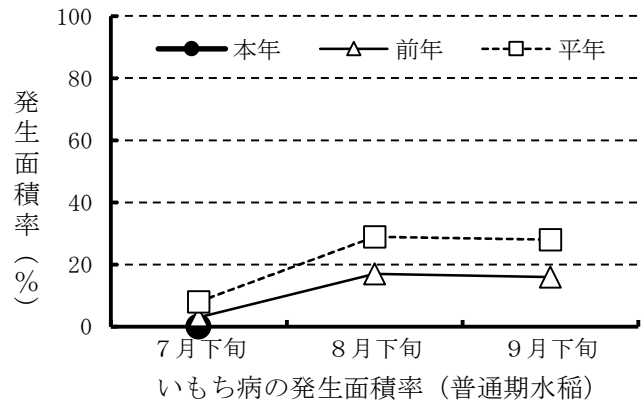
- (ア) 発生地域 県内全域
(イ) 発生量 穂いもち：やや少
葉いもち：やや少

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや少
発生面積率 0 % (平年 8 %)
：やや低い

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 粉剤または液剤による穂いもち防除は、穂ばらみ期～穂揃期に行う。
(イ) 窒素質肥料の多施用は発生を助長するので、各地域の栽培暦に準じた適正な施肥管理に努める。



(2) 紋枯病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県内全域
(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

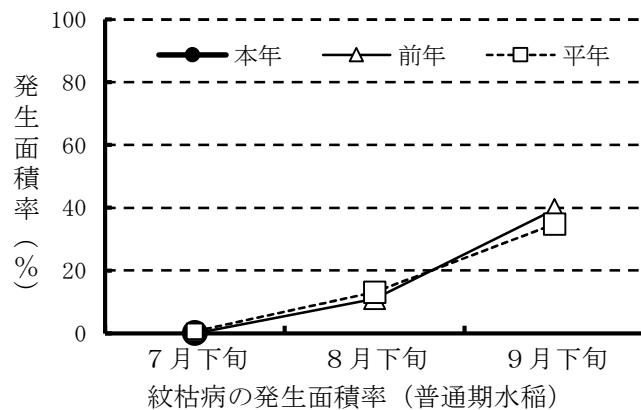
- (ア) 調査結果 発生量：並
発生面積率 0 % (平年 1 %)
：並

(イ) 気象予報

気温：高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 粉剤または液剤による防除は、早生品種では出穂前 1 週間～出穂期、中晩生品種では出穂前 1～2 週間に行う。
(イ) 出穂後は、急激な上位部への病斑の進展をするので、発生を見逃さないように注意する。
(ウ) 窒素質肥料の多施用は発生を助長するので、各地域の栽培暦に準じた適正な施肥管理に努める。



(3) トビイロウンカ (令和8年度技術情報第13号、7月14日付け参照)



ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生面積率 0% (平年 5%)

：やや低い (－)

60W水田予察灯での6月1日～

7月27日の誘殺虫数 43頭

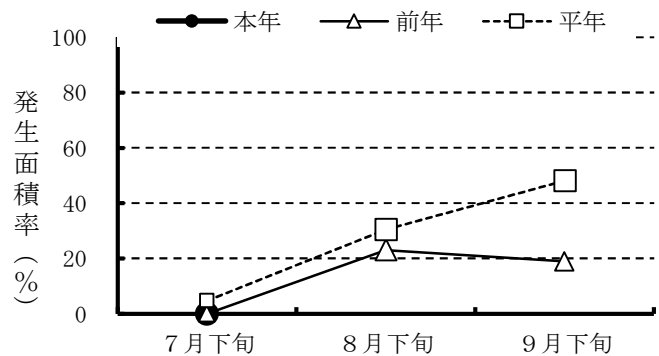
(平年 40.4頭)：やや多い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 防除適期は、6月21日の飛来によ

来する第2世代幼虫が8月8～11日、7月6日の飛来に由来する第2世代幼虫が8月21～24日と予想される(表1、図1)。

(イ) 本虫は稲の株元に生息するので、粉剤や液剤で防除する場合は、農薬が株元に十分届くように散布する。



トビイロウンカの発生面積率(普通期水稻)

(4) コブノメイガ (令和8年度注意報第4号、7月29日付け参照)



ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：多

発生面積率 49% (平年 18%)：高い

発生程度の高いほ場を認めた (+)

ウ 防除上注意すべき事項

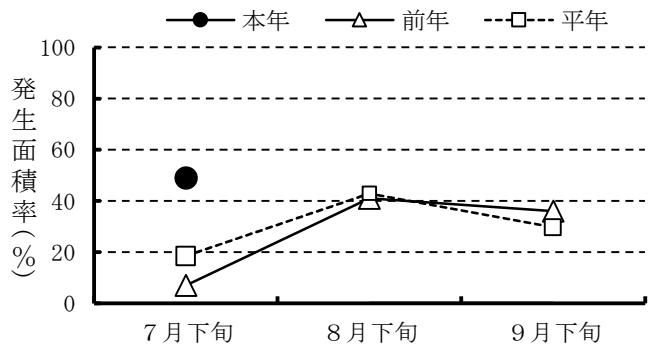
(ア) 6月22日の誘殺に由来する第1世

代成虫の発蛾最盛日は7月24日頃、

第2世代成虫の発蛾最盛日は8月22日頃と予測される(表1、図2)。

(イ) 粒剤による防除は発蛾最盛日、粉剤または液剤による防除は発蛾最盛日の7～10日後に散布する。

(ウ) 止葉を含む上位3葉への被害は収量・品質に影響するので、第2世代幼虫の防除は重要である。



コブノメイガの発生面積率(普通期水稻)

表1 予察灯等におけるウンカ類及びコブノメイガの誘殺状況

日付	60W予察灯(水田)						ジョンソントラップ			フェロモン
	南さつま市			さつま町			南さつま市			
	セジロ ウンカ	トビイロ ウンカ	ヒメトビ ウンカ	セジロ ウンカ	トビイロ ウンカ	ヒメトビ ウンカ	セジロ ウンカ	トビイロ ウンカ	ヒメトビ ウンカ	コブノ メイガ
4～5月計	29	0	1	調査なし			4	0	13	10
6/1	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0
6/2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6/3	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6/4	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
6/5	25	0	0	1	0	2	1	0	0	3
6/6	10	0	0	0	0	0	0	0	0	1
6/7	3	0	0	0	0	0	0	0	0	3
6/8	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
6/9	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6/10	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6/11	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
6/12	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6/13	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
6/14	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6/15	0	0	0	0	0	2	0	0	0	1
6/16	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6/17	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6/18	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6/19	10	0	0	4	0	0	0	0	0	0
6/20	0	0	0	0	0	0	0	1	1	4
6/21	43	4	2	2	0	0	0	0	1	11
6/22	1	1	0	2	0	0	0	0	0	20
6/23	2	0	0	0	0	0	0	0	0	7
6/24	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
6/25	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6/26	4	0	0	5	1	0	0	0	0	3
6/27	6	0	0	5	1	0	0	0	1	4
6/28	4	0	0	0	0	0	0	0	1	1
6/29	19	0	1	0	0	0	0	0	0	1
6/30	4	0	0	0	0	0	0	0	0	7
6月計	137	5	4	12	1	8	1	1	6	72
7/1	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1
7/2	23	1	5	1	0	0	2	0	0	0
7/3	49	1	0	55	0	0	0	0	1	0
7/4	-	-	-	0	0	0	3	0	0	0
7/5	-	-	-	0	0	0	0	0	0	0
7/6	5	15	2	12	0	1	0	2	0	0
7/7	17	3	1	0	0	0	0	0	1	0
7/8	2	1	0	1	1	0	0	0	0	3
7/9	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
7/10	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0
7/11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
7/12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
7/13	0	0	0	1	0	0	0	0	0	6
7/14	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
7/15	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
7/16	4	2	0	0	0	0	0	0	0	2
7/17	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0
7/18	0	1	0	0	0	0	3	0	0	5
7/19	1	3	1	0	0	0	0	0	0	12
7/20	1	10	0	0	0	0	0	1	0	25
7/21	1	0	0	0	0	1	0	0	0	30
7/22	1	0	0	0	1	0	0	0	0	32
7/23	3	0	0	0	0	0	1	0	0	56
7/24	38	0	0	0	2	0	0	0	0	18
7/25	3	0	0	0	0	0	0	0	1	18
7/26	6	0	1	0	0	0	0	0	0	33
7/27	40	0	0	0	0	0	0	0	0	23
7/28										24
7/29										
7/30										
7/31										
7月計	197	38	11	72	4	2	9	3	4	293
6～7月計	334	43	15	84	5	10	10	4	10	365

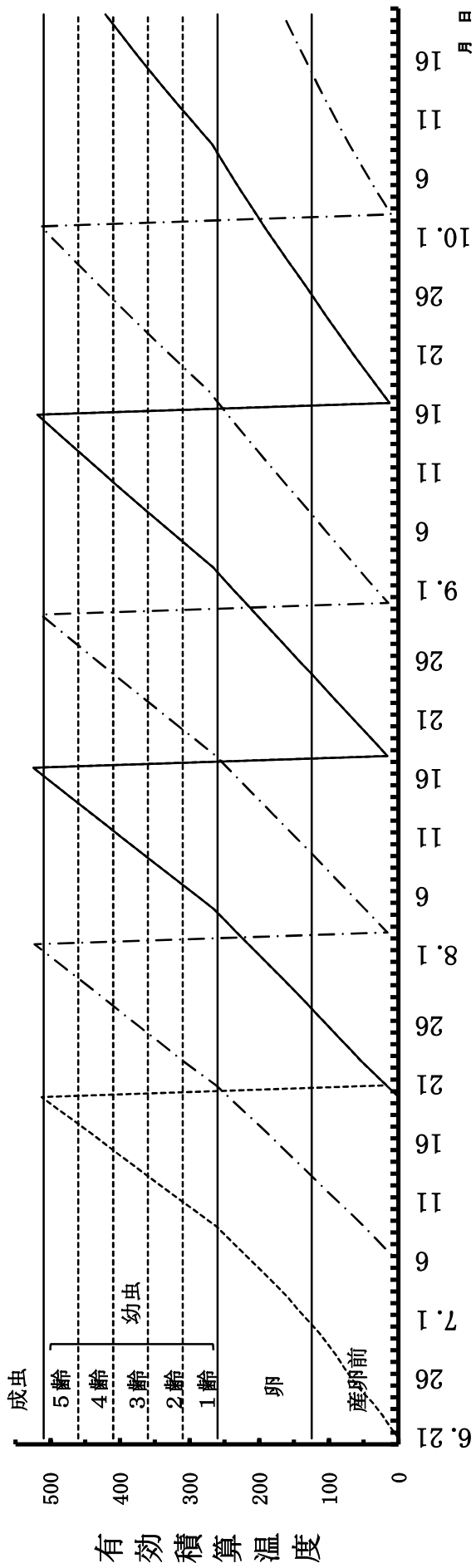


図1 トビロウシカの有効積算温度による発生経過予測図（南さつま市金峰町）

注1）起算日：60W予察灯に多数誘殺された6月21日、7月6日
 注2）気温：加世田のアメダスポイントを利用（6月24日以降は平年値）

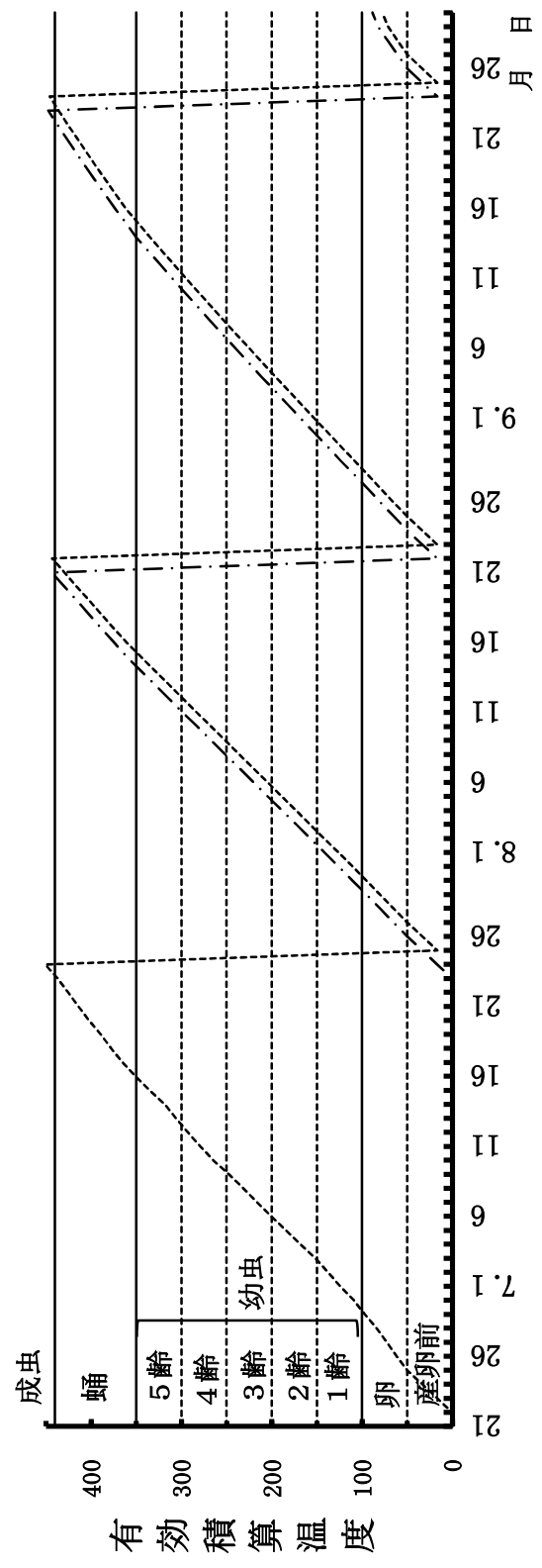


図2 コブノメイガの有効積算温度による発生経過予測（南さつま市金峰町）

注1）起算日：フェロモントラップにおいて多数誘殺された6月22日、7月23日
 注2）気温：図1と同じ

2. サツマイモ

(1) ナカジロシタバ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率 13% (平年 34%)

：やや低い

発生程度の高いほ場を認めた (+)

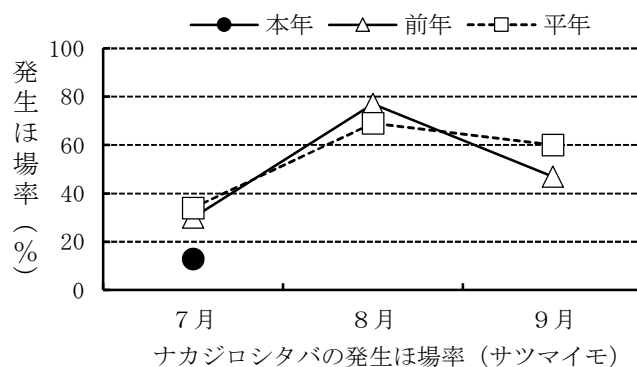
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 未展開葉での食害が認められ、若齢

幼虫が多くみられる時期に防除する。

(イ) 農薬散布後も幼虫の発生量が多い場合は、2～3週間後に追加防除を行う。

(ウ) 老齢幼虫が多くなると食害の進展が急速に進むので、適期に防除する。



※被害葉面積率5%以下は発生無しとした。

(2) ヒルガオハモグリガ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：多

発生ほ場率 19% (平年 3%) : 高い

発生程度の高いほ場を認めた (+)

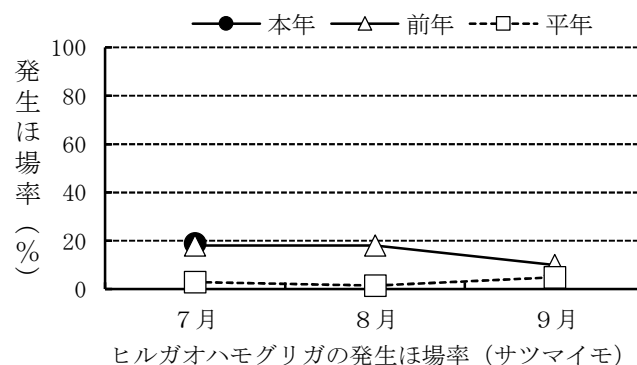
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 幼虫の農薬に対する感受性は生育に伴って低下するので、若齢幼虫期の防除に努める。

(イ) 発生回数が多いため各虫態が混在しており、どの薬剤も蛹に対する効果は劣るので、多発時は1週間おきに2～3回防除する。

(ウ) ジアミド系殺虫剤に効果の低下した個体が見られるので薬剤選定の際は注意する。

(令和6年度技術情報第27号、令和7年2月21日付参照)



※被害葉面積率5%以下は発生無しとした。



3. サトウキビ

(1) バッタ類

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 熊毛・奄美地域
 (イ) 発生量 熊毛地域 並
 奄美地域 多

イ 予報の根拠

<熊毛地域>

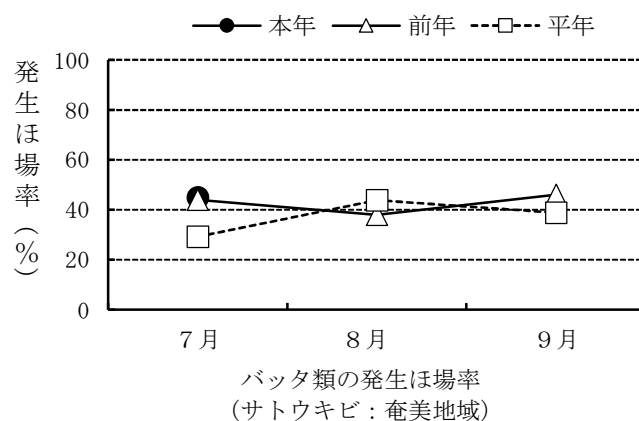
- (ア) 調査結果 発生量：並
 発生ほ場率 0 % (平年 2 %) : 並

<奄美地域>

- (ア) 調査結果 発生量：多
 発生ほ場率 45 % (平年 29 %) : 高い
 発生程度の高いほ場を認めた (+)

イ 防除上注意すべき事項

- (ア) 農薬散布は、バッタ類の活動の鈍い早朝に一斉に行うのが効果的で、近隣作物へのドリフト（飛散）に注意する。
 (イ) イネ科牧草では、幼虫の多発生が見られる場合、刈り取り回数を増やすなどして物理的防除に努める。



Ⅱ. 野 菜

1. イチゴ（苗床）

（1）うどんこ病

ア 予報内容

（ア）発生地域 県本土

（イ）発生量 並

イ 予報の根拠

（ア）調査結果 発生量：並

発生ほ場率 36%（平年 22%）

：やや高い

発生程度は低い（－）

ウ 防除上注意すべき事項

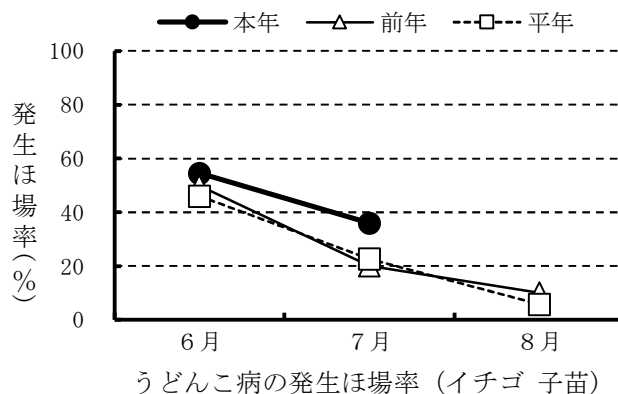
（ア）本病が発生しやすい葉裏をよく観察し、早期発見と初期防除に努める。

（イ）雨よけ育苗施設では発生が多くなる傾向にあるので注意する。

（ウ）発病葉や古葉は除去し、ほ場外へ持ち出して処分する。

（エ）定植前までの防除を徹底し、葉裏や下位葉に薬液が十分付着するよう散布する。

（オ）作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。



（2）炭疽病

ア 予報内容

（ア）発生地域 県本土

（イ）発生量 やや少

イ 予報の根拠

（ア）調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率 0%（平年 13%）

：やや低い

ウ 防除上注意すべき事項

（ア）苗は十分な間隔を置いて並べ、通風を図る。

（イ）灌水は可能な限り水滴が細かい灌水チューブ等を用い、適正な水管理に努める。

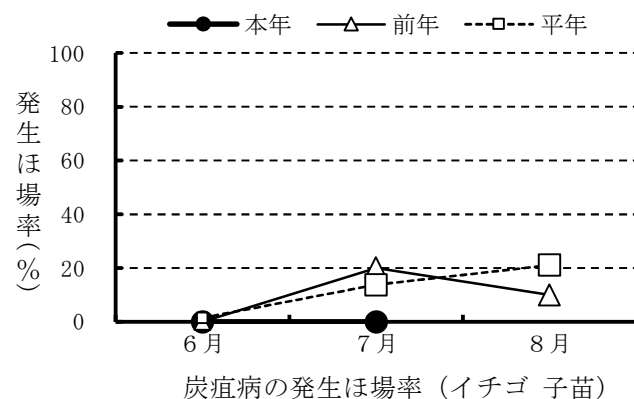
（ウ）台風通過後や長雨等の雨水の跳ね上がりで感染しやすいため、発生を認めたら直ちに防除する。

（エ）古葉は潜在感染している場合が多いので、新葉展開後は降雨時を避けて摘葉する。

（オ）生育不良の親株や萎凋した苗は、直ちに除去し、ほ場外で適切に処分する。

（カ）予防散布は10～14日間隔で行い、株元、ランナー、葉裏などに付着するよう十分量を散布する。発生が認められた場合は散布間隔を短縮する。

（キ）育苗ほ場周辺や育苗ベンチ下の除草を徹底する。



(3) ハダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率 36% (平年 37%) : 並

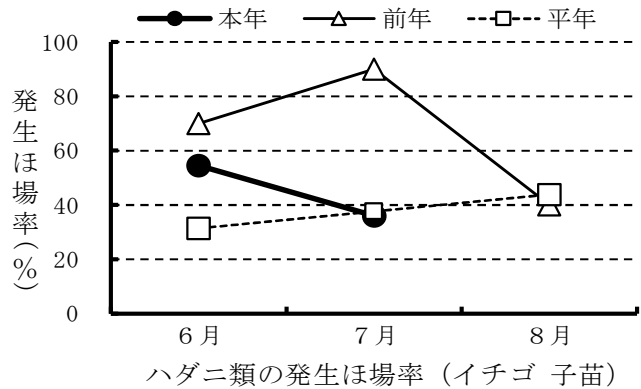
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 管理作業時に注意深く観察し、早期防除に努める。

(イ) 寄生葉や摘葉した葉は、ほ場外に持ち出し処分する。

(ウ) 農薬の防除効果を高めるため、下葉かきを行ってから、薬液が葉裏までよく付着するように丁寧に散布する。

(エ) 薬剤感受性の低下を防ぐため同一系統の農薬の連用を避け、気門封鎖剤など作用性の異なる農薬 (RAC コード参照) のローテーション散布に努める。



2. サトイモ

(1) 疫病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率 30% (平年 43%)

: やや低い

発生程度の高いほ場を認めた (+)

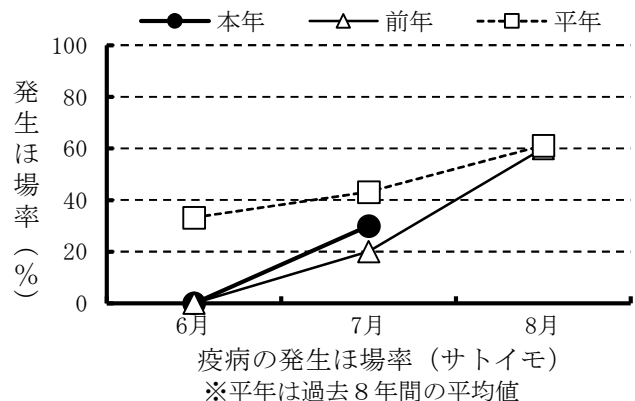
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 本病は7月から8月にかけて発生が

増加する傾向にある。ほ場の縁部分で発生しやすいため、ほ場周囲をよく見回り、早期発見に努める。

(イ) 発病茎葉は発生源となるので、摘み取ってほ場外へ持ち出し適正に処分する。

(ウ) 台風等や強風雨は感染を助長するので急激に発生が拡大する。そのため、発生を確認したら直ちに治療効果がある農薬を散布する。効果的な散布方法については、令和3年度鹿児島県農業開発総合センター普及情報「降雨量と薬剤特性に考慮したサトイモ疫病の効果的な防除体系」を参照。



(2) ハスモンヨトウ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

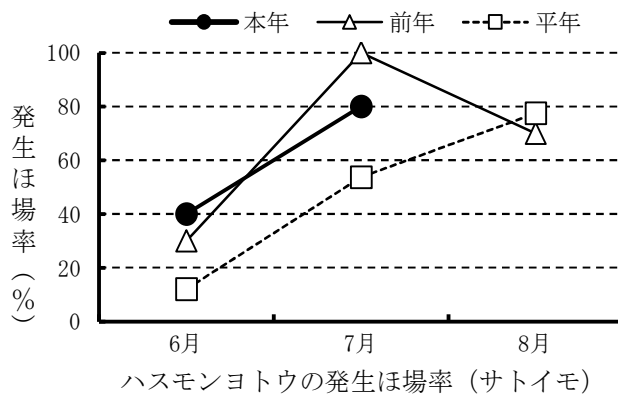
(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率 80% (平年 56%)

：やや高い



6～7月のフェロモントラップ総誘殺数：並～多

	南さつま市	鹿屋市
発生量	多	並
誘殺数 (6月5半旬～7月4半旬)	12,070頭 (平年6,167頭)	3,399頭 (前年3,999頭)

※鹿屋市は2024年から調査地点を変更したため、前年比による概評を記載

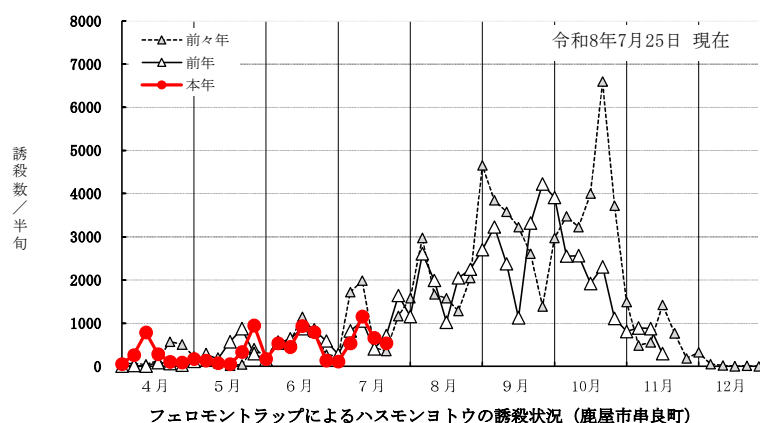
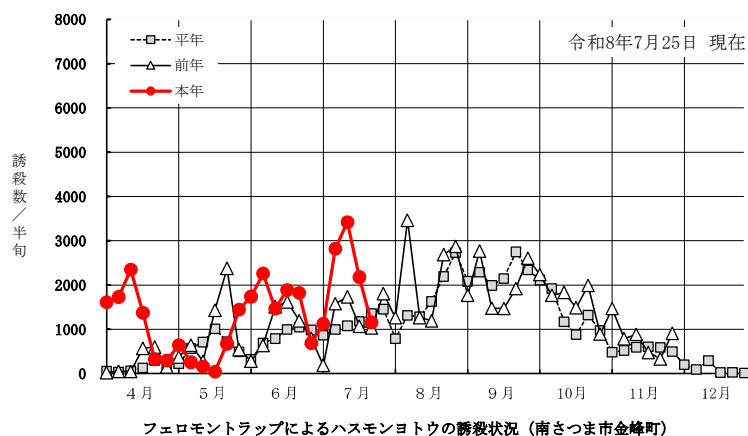
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 若齢幼虫は集団で表皮を残して食害し、白変葉を生じるので、ほ場を見回り早期発見に努める。

(イ) 卵塊や若齢幼虫が寄生している葉は、見つけ次第摘み取り処分する。

(ウ) 中・老齢幼虫になると農薬の効果が低下するので、防除は若齢幼虫の多い時期に行う。

(エ) ジアミド系農薬に対して感受性低下が認められる。他の使用農薬も含め、散布後の効果を確認する。



Ⅲ. 花き

1. キク

(1) ハダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 少

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：少

発生ほ場率 20%（平年 43%）：低い

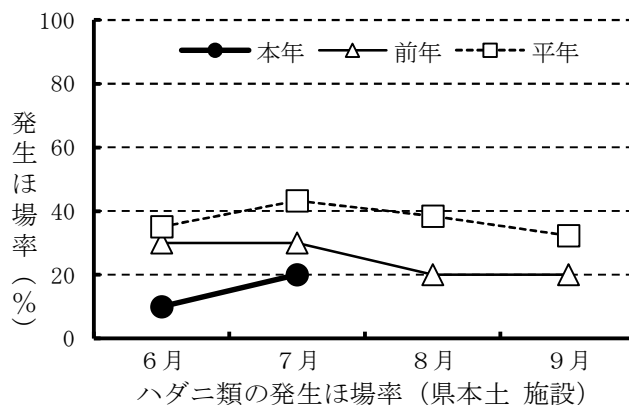
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 出入口や前作での発生場所近く等で
スポット状に発生するが多いので、
ほ場全体をよく見回り、早期発見と初期
防除に努める。

(イ) 薬液は葉裏までよく付着するように散布する。

(ウ) 作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。

(エ) ほ場内及びその周辺の除草に努める。



(2) アザミウマ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率 30%（平年 39%）

：やや低い

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) アザミウマ類（クロゲハナアザミウマを除く）の発生動向を把握するためには、出入口や開口部付近での青色粘着シート（設置）が有効である。

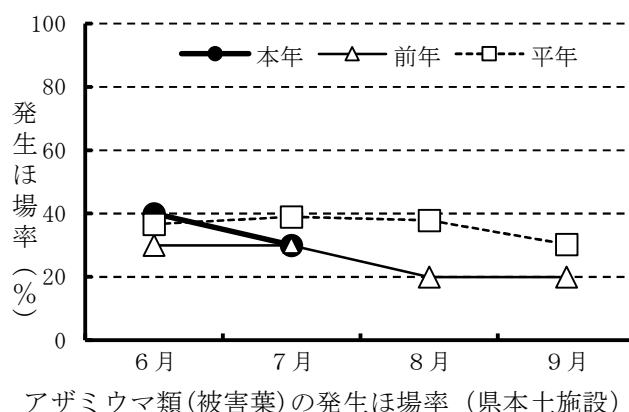
(イ) クロゲハナアザミウマは、主に中下位葉に寄生しているため、よく観察して早期発見に努め発生が認められた場合は、薬液が中下位葉の葉裏まで付着するよう丁寧に散布する。

(ウ) 作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。

(エ) アザミウマ類は、キクえそ病の病原ウイルス（TSWV）とキク茎えそ病の病原ウイルス（CSNV）を媒介するため、ほ場への侵入防止と早期発見及び早期防除に努める。

(オ) ほ場内及びその周辺の除草に努める。

(カ) 母株や苗は導入時に、アザミウマ類の寄生やウイルス病の発生がないか確認し、持ち込まないようにする。



IV. 果 樹

1. カンキツ

(1) かいよう病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域（果実） 並

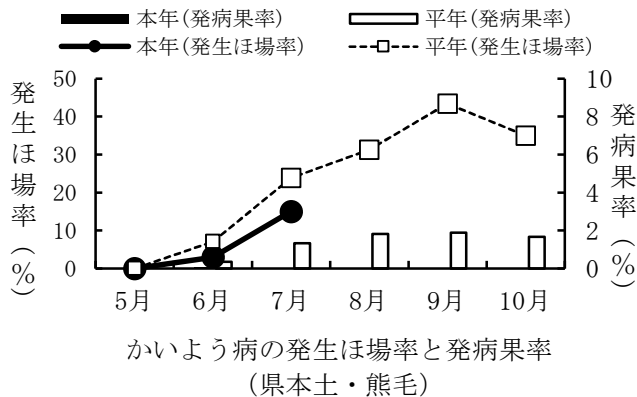
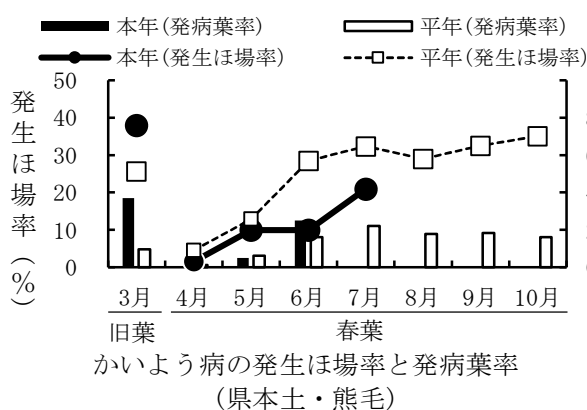
奄美地域（果実） やや多

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果

	春 葉	果 実
発生量	並	並
発生ほ場率	21%（平年 32%）：やや低い	15%（平年 23%）：やや低い
発病率	3.9%（平年 2.1%）：高い	2.2%（平年 1.1%）：高い
	発生程度の高いほ場を認めた（+）	発生程度の高いほ場を認めた（+）



<奄美地域>

(ア) 調査結果

	春 葉	果 実
発生量	並	やや多
発生ほ場率	0%（平年 1%）：並	29%（平年 4%）：高い
発病率	0%（平年 0%）：並	0.3%（平年 0.1%）：高い
		発生程度は低い（-）

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 感染前の防除効果が高いので、強風雨等の襲来前には、予防散布に努める。

(イ) ミカンハモグリガの食入痕から感染しやすいので、ミカンハモグリガの防除に努める。

(ウ) 強風雨等により葉や果実に生じた傷口から感染するので、防風ネットの設置や防風樹の管理に努める。

(2) 黒点病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全地域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 並

奄美地域 並

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率 9% (平年 24%) : やや低い

発病果率 3.3% (平年 2.6%) : 並

発生程度の高いほ場を認めた (+)

<奄美地域>

(ア) 調査結果 発生量：並

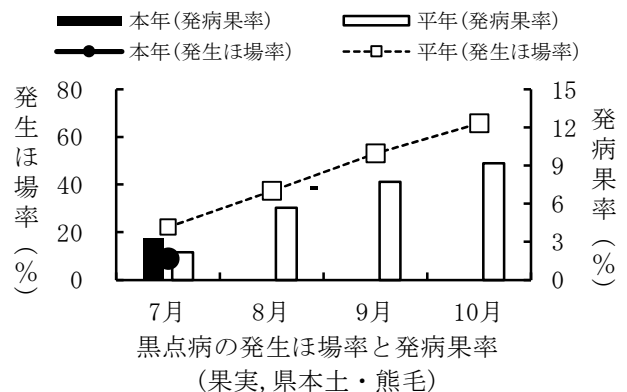
発生ほ場率 0% (平年 1%) : 並

発病果率 0% (平年 0%) : 並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 薬剤防除は累積降水量 200~250mm を目安とするが、近年、数日でこの雨量を超える場合が多い。薬剤散布間隔は気象情報に留意し、簡易雨量計等の園内設置により防除の目安とする。

(イ) 伝染源となる枯れ枝はこまめにせん除し、せん定くずは園外に持ち出して処分する。



(3) ミカンハダニ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全地域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 やや多

奄美地域 やや少

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果 (春葉) 発生量 : やや多

発生ほ場率 23% (平年 22%) : 並

寄生葉率 6.8% (平年 4.9%) : やや高い

<奄美地域>

(ア) 調査結果 (春葉) 発生量 : やや少

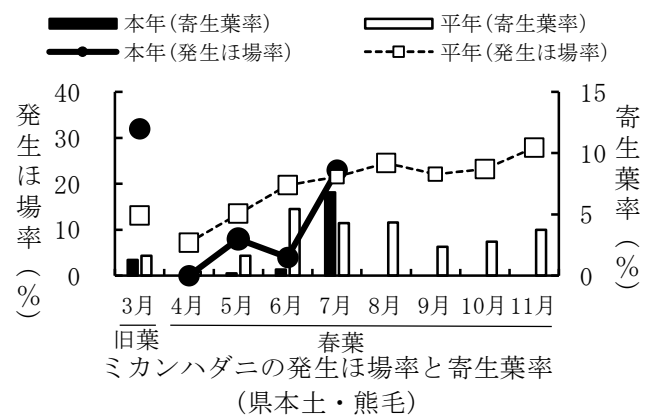
発生ほ場率 0% (平年 6%) : やや低い

寄生葉率 0% (平年 0.2%) : 並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 1葉当たり雌成虫数 0.5~1.0頭 (寄生葉率で 30~40%) を目安に防除する。

(イ) 薬剤抵抗性を生じさせないため、同一系統、同一殺ダニ剤の使用は年1回とする。



(4) ゴマダラカミキリ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 並

奄美地域 並

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果 発生量 : 並

発生ほ場率 21% (平年 18%) : 並

寄生率 0.2% (平年 0.4%) : やや低い

<奄美地域>

(ア) 調査結果 発生量 : 並

発生ほ場率 0% (平年 0%) : 並

寄生率 0% (平年 0%) : 並

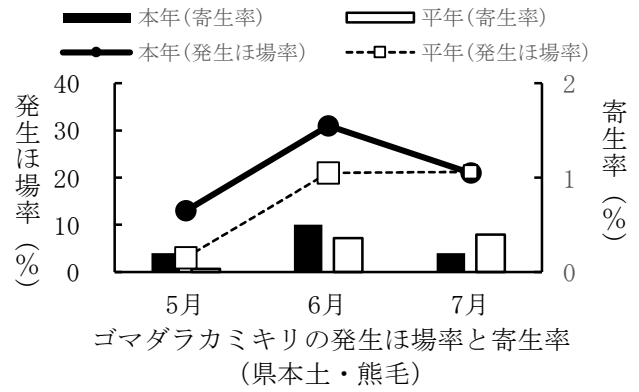
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 産卵は7月上旬頃が盛期で、8月まで続く。

(イ) 朝夕、成虫の活動が緩慢な時間帯に捕殺する。卵・幼虫の圧殺・刺殺の効果は確実である。

(ウ) 樹冠下の除草は、産卵防止に効果的である。

(エ) 幼木の主幹地際部を物理的に遮断（ストックカバー法）すると、成虫の産卵を防止できる。



防除に関する今月の留意事項

2. 果樹共通

(1) 果樹カメムシ類（ツヤアオカメムシ、チャバネアオカメムシ）

ア 7月の予察灯におけるツヤアオカメムシ、チャバネアオカメムシの誘殺虫数は、鹿屋市が平年より多かったが、出水市、いちき串木野市、南さつま市ともに平年と同程度だった。なお、最新の誘殺状況は、ホームページ (<https://www.pref.kagoshima.jp/ag13/kiad/boujosho/trap.html>) を参照

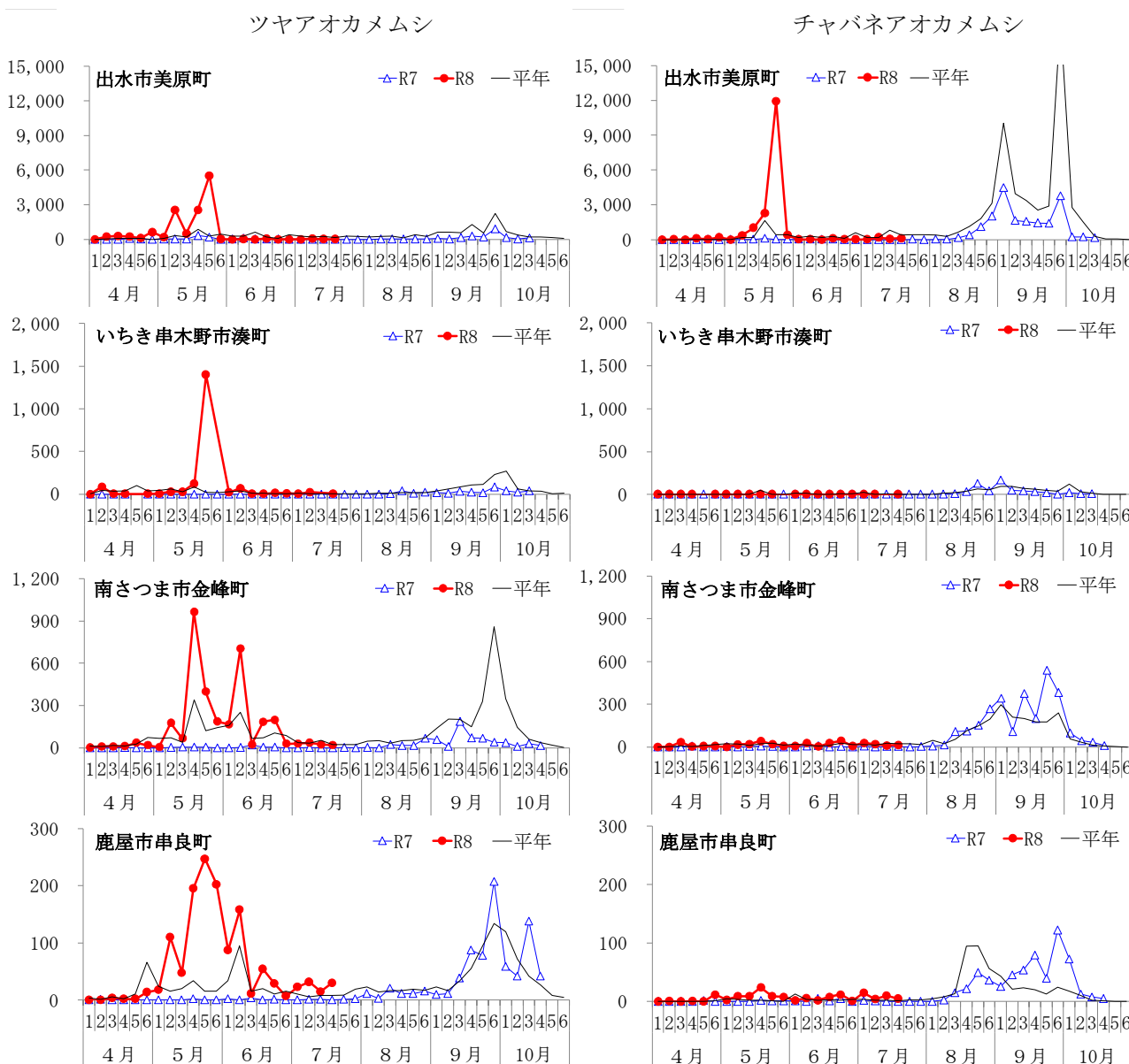


図1 予察灯での果樹カメムシ類の誘殺虫数の推移

注) 平年は過去10年間の平均値。捕虫方法は南さつま市金峰町100w水銀灯、鹿屋市は捕虫用蛍光灯と白色蛍光灯(20W)を併設、他は40W捕虫灯。

V. 茶 樹

1. チャ

(1) 炭疽病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率 54% (平年 54%) : 並

1 m²当り病葉数 6.4 枚 (平年 6.9 枚)

: 並

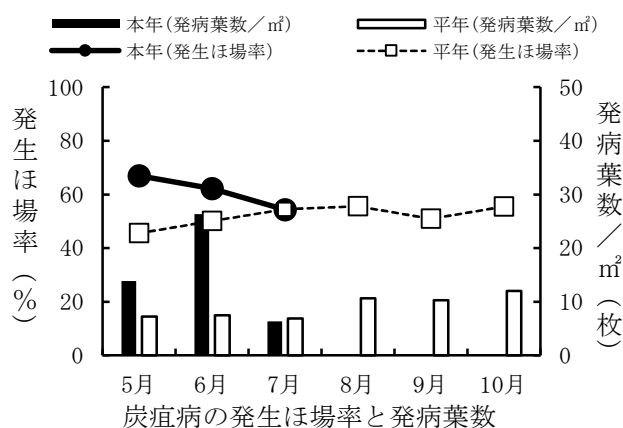
発生程度の高いほ場を認めた (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 発生源となる病葉が少なくても、生育期に降雨が続くと発生しやすい。

(イ) 秋芽萌芽期～1葉期に予防剤で、3～4葉期に治療剤で防除を行う。

(ウ) 降雨が続き、防除時期が遅れた場合は3～4葉期に予防剤と治療剤を混用して防除を行う。



(2) 新梢枯死症 (輪斑病菌による)

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 少

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量 (輪斑病) : 少

発生ほ場率 9% (平年 18%) : 低い

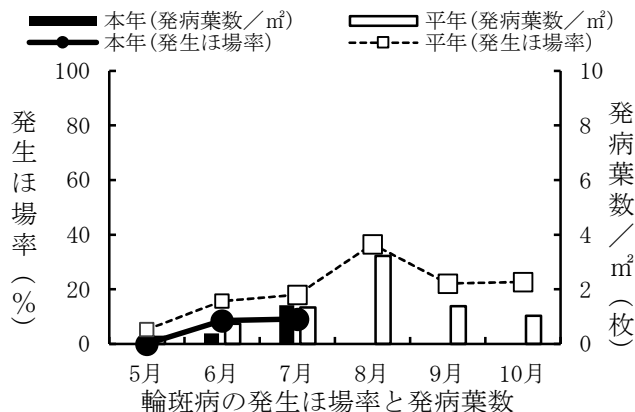
1 m²当り病葉数 1.4 枚 (平年 1.3 枚 : 並)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 二・三番茶摘採残葉に輪斑病の発生多

く、秋芽萌芽期～3葉期に降雨が多いと多発する。

(イ) 炭疽病との同時防除を考慮する。



(3) 網もち病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 やや少

(ウ) 感染時期 秋芽生育期

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率 0% (平年 1%) : やや低い

1 m²当りの病葉数 0 枚 (平年 0.0 枚)

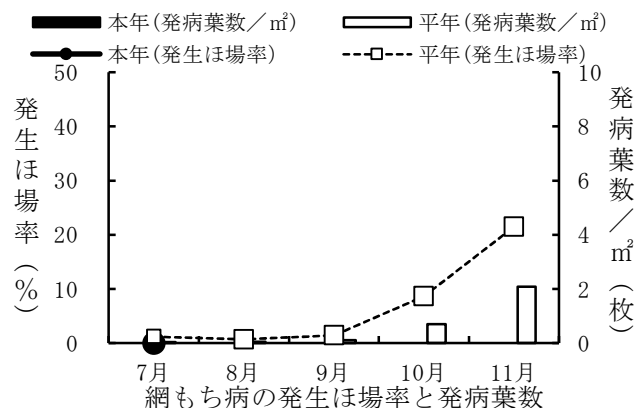
: 並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 本病の感染は新葉に限られ、秋芽生育期に多湿条件が続くと多発する。

(イ) 更新園であっても周辺に発生源があると多発するおそれがあるので防除を行う。

(ウ) 常緑園では、3～4葉期の防除に加えて、9月上旬にも銅剤等で防除を行う。



(4) チャノコカクモンハマキ、チャハマキ

ア 予報内容

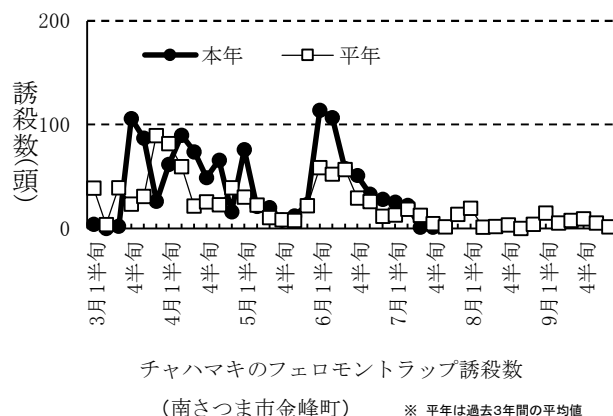
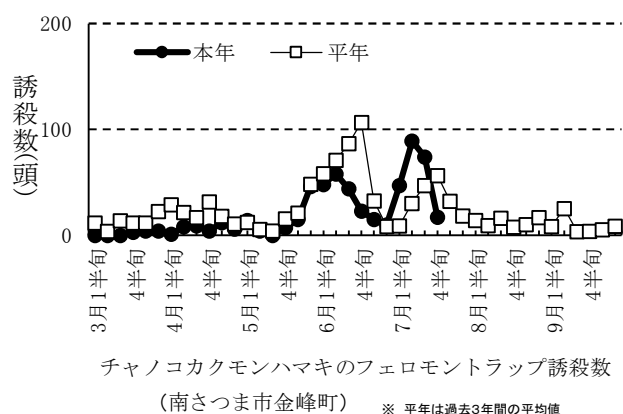
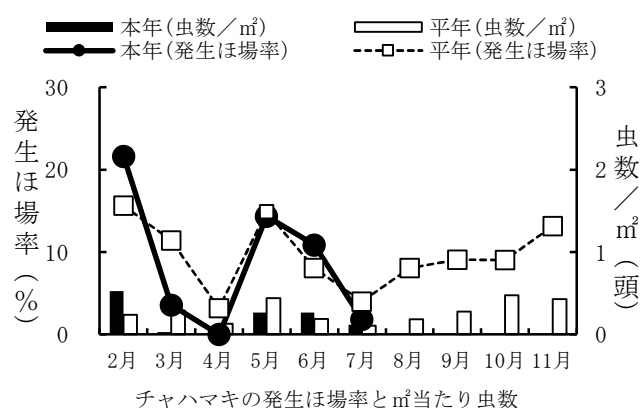
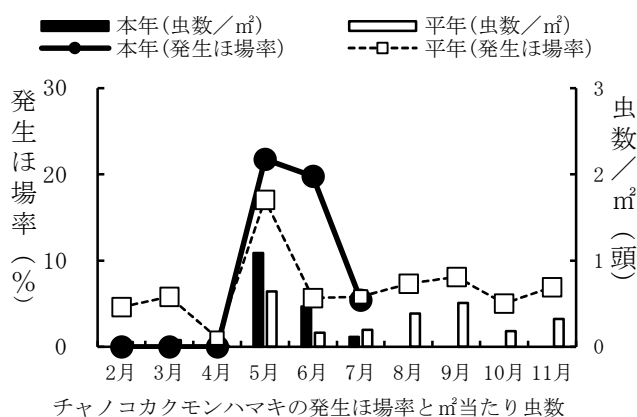
(ア) 発生地域	県本土	
(イ) 発生量	チャノコカクモンハマキ	並
	チャハマキ	並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果

	チャノコカクモンハマキ	チャハマキ
【巡回調査】		
発生量	並	並
発生ほ場率	5 % (平年 6 %) : 並	2 % (平年 4 %) : 並
m ² 当たり虫数	0.1頭 (平年 0.2頭) : 並	0.1頭 (平年 0.1頭) : 並
【南さつま市金峰町のフェロモントラップ】		
誘殺数* (6月4半旬~7月4半旬)	275頭 (平年 290頭)	161頭 (平年 114頭)

* 平年は過去3年間の平均値



ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 発生量・発生時期は地域間差があるので、フェロモントラップ等で発生状況を把握する。
- (イ) 農薬による防除適期は、ふ化～2 齢期（発蛾最盛日の 10～15 日後）である。
- (ウ) ジアミド系農薬に対する感受性が低下している地域があるので、地域の栽培暦に従って農薬を選択する。

(5) チャノホソガ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：多

【巡回調査】

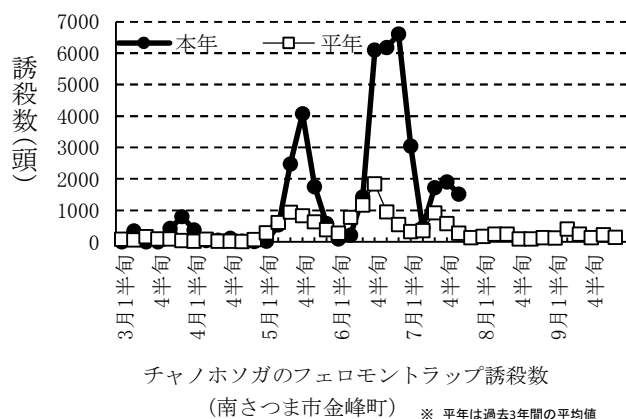
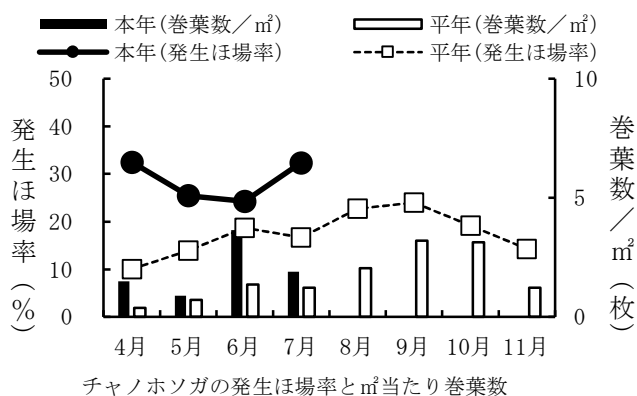
発生ほ場率 32% (平年 17%) : 高い

m²当り巻葉数 1.9 枚 (平年 1.2 枚) : やや多

発生程度の高いほ場を認めた (+)

【南さつま市金峰町フェロモントラップ】

誘殺数 (7月1半旬~7月4半旬) 5,616 頭 (平年 2,186 頭) * 平年は過去3年間の平均値



ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 巻葉してからの防除は効果が劣るので、秋芽萌芽期~3葉期に防除を行う。

(イ) IGR 剤及びジアミド系農薬に対する感受性が低下している地域があるので、地域の栽培暦に従って農薬を選択する。

(6) チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマ

ア 予報内容

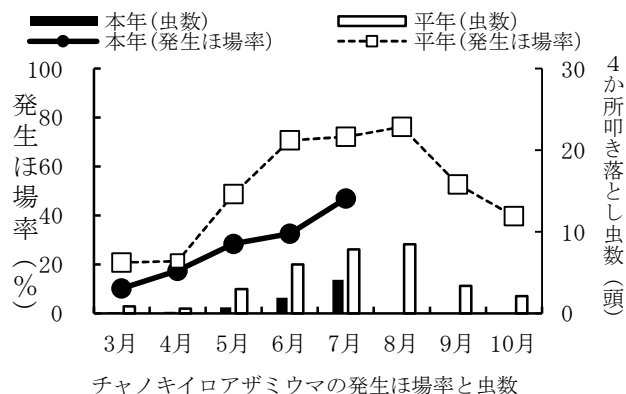
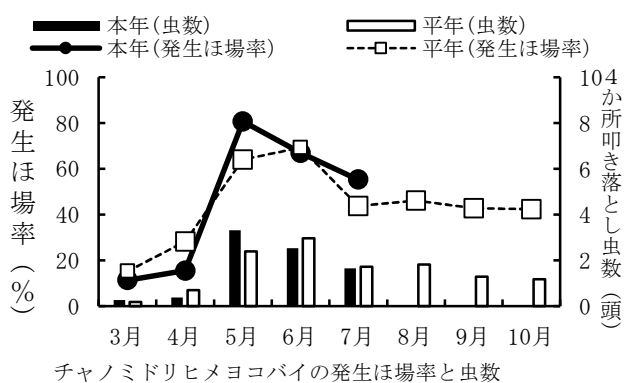
(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量
チャノミドリヒメヨコバイ やや多
チャノキイロアザミウマ 少

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果

	チャノミドリヒメヨコバイ	チャノキイロアザミウマ
【巡回調査】		
発生量	やや多	少
発生ほ場率	55%(平年 44%) : やや高い	47%(平年 72%) : 低い
虫数(4か所たたき落とし)	1.6頭(平年 1.7頭) : 並	4.1頭(平年 7.9頭) : やや少



ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 秋芽での被害は翌年の一番茶への影響が大きいため秋芽の防除を徹底する。

(イ) 晴天が続くと多発する場合があるので注意する。特に更新園や幼木園では、新芽の伸長期間が長いので被害が継続し樹体への影響が大きい。

(7) カンザワハダニ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 多

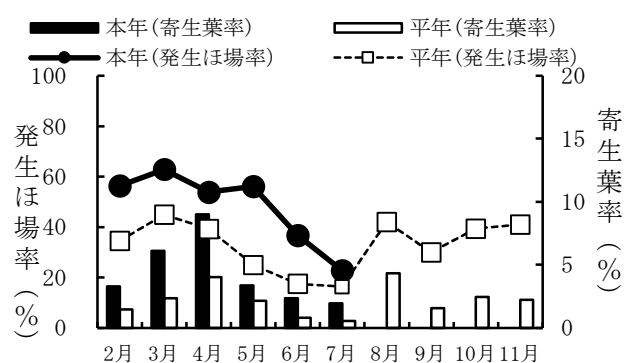
イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：多

発生ほ場率 23% (平年 16%) : やや高い

寄生葉率 1.9% (平年 0.6%) : 高い

発生程度の高いほ場を認めた (+)



カンザワハダニの発生ほ場率と寄生葉率

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 今後、天敵の活動が活発になる時期なので、防除する場合は天敵に影響の少ない農薬を使用する。

(イ) 更新園では秋芽生育期に多発することがある。

農薬の適正使用について

農薬は以下の点に注意して適正に使用しましょう。

1. 使用前にラベルや説明書をよく読む。
決められた対象作物・使用時期・回数・使用濃度等を守り、記載された用途、方法以外では使用しない。
2. 使用する農薬にあわせて、適切な防除衣、保護具（マスク・手袋等）を着用する。
3. 散布前には防除器具の整備・点検をする。
4. 体調がすぐれないときは散布作業を避ける。
5. 散布時には農薬がほ場の外に飛散したり、流出したりしないよう十分注意する。
6. クロルピクリン剤は、住宅地及び畜舎に隣接するほ場や、土壌が乾燥しているときは使用しない。注入後は直ちに穴をふさぎポリエチレンフィルム等で10日以上被覆する。
7. 毒性が強い農薬は、施設内や噴霧のこもりやすい場所では使用しない。
8. 使用期限の切れた農薬、不要になった農薬及び使用済みの空容器は適正に処分する。
9. 農薬は食品と区別し、鍵をかけて保管する。
10. 農薬の散布記録をつけておく。

「予報の根拠」の記載方法

- 調査結果の発生量は、前月の巡回及び定点調査による。
- 野菜類共通病虫害の発生量は、各作物での発生量やトラップ調査結果等に基づいた総合評価。
- 調査結果や気象予報等の末尾の（＋）、（－）は、発生量の増加、減少要因を示す。
- 気象予報は、向こう1か月の長期予報。
- 平年値は原則として過去10年間の平均値を使用。